

# 新春文芸

## 新春に詠む短歌

春の花想わせるかな幾色のたすきは燃ゆる箱根駅伝

毎年正月恒例の箱根駅伝、年の始めの新たなドラマの展開は多くの希望をもたらすものです。 色川 昌志

樹々の上ひいよひいよと子を育てひよは群れなし春野を飛び

ひよ鳥は公園などの樹に群がって、その声は幼稚園児達の遊び声に似てにぎやかだが、飛び立ってしまつと寂しいものである。 宇留野むつみ

小貝川の土手に登りて新春の青一色の筑波山見上ぐ

小貝川の近くの小さな町に生まれ茨城県をほとんど出てない私に、筑波山は守護神のように。青々と冴える筑波山。 海老沢幸子

新米を食べさせたくて逸速く夫は荷造る子等に送ると

子供等も五十歳代。それでも夫は、子供等に食べさせようと痛む腰を自ら労りながら、米や野菜の荷造りをしている。 海老原鮎子

輪飾りを貰ひはなやぐ車椅子平成最後の初日耀ふ

莉妻が車椅子になって四半世紀、寝たきり防止のプール通いに車椅子は欠かせない。有り難いことだ。 栗田 幸一

病つつ後期高齢に感謝して夫と迎える新春の喜び

難病「溶血性貧血」となり十年余。一昨年は百七歳の義母を送り、今は、高齢の夫と二人元氣に家で正月を迎えられて幸せである。 腰山 佑子

筑波嶺の山ふところの宵明り点れば温き母の思い出

茨城県に住んで半世紀以上、私達を見守るように立つ筑波山は、母のようにも父のようにも、古里、友達のように見えます。 佐藤 哲子

大空へむかいて鶴の羽交きは未来の平和祈る心地す

初春に神秘的な鶴の姿を見ていると世界の平和を祈る心地になります。 櫻井 雅江

今朝の春霞ヶ浦に白鳥と枯葉一枚静かなるかな

霞ヶ浦によく似合う白鳥と役目を終えた一枚の枯葉が静かに新年を迎えた。宇宙に行く時代、今年の地球は静かであつてほしい。 高井 昭

清らなる谷の瀬音も新玉の年立ち替るふるさとの峰

東京に住み、望郷の念にかられ故郷に戻つて半世紀、平成も移り、変らず雄々と立つ、宝篋、小野に竜ヶ峰の山々に春を奏ぐ。 荒井 洋子

万歳のかたちち眠るみどり児の待ち受け画面いく度も見る

ケイタイの待ち受け画面に三か月目の孫がいる。日に幾度も見ているが、離れて暮らしているが確かな温もりを貰っている。 小松崎みずえ

喜寿のわれピンクの自転車新調す今しばらくを元氣にあらんと

修理しつつ乗っていた自転車を思い切って買い換えた。今年も元号も新しくなる。新しい時代も見てみたい。 平澤 良子

春の日のまだらに揺れる山裾に水子地蔵は身を寄せあえり

水子には生まれて日のたない赤子もいるし、この世に生を受けられぬ子もいるが、水子地蔵達の身を寄せ合う姿に心が癒される。 井上 寛江

桜川の岸辺背にして細く立つ鷺に真直ぐ初日の届く

桜川の向う岸に立つ一羽の白鷺に初日が射し真直ぐ帯のように光が届いている光景に出会ひました。 瀬古澤和子

孫といふ十八年をほほえみて平成過ぐる鐘の音ひびき

さまざまな出来事があった平成も後わずか。除夜の鐘は、ここに響いてくる。歳の差の違つ孫たちと楽しくくらせたことも。 井上 秀子

古えの鎌倉街道に祀られし小さな碑に花の供はる

天川団地近くに残る街道は、下草が刈られ、杉の巨木が並ぶ、辻に立つ小さい碑に、花が手向けられ先人達の足跡が偲ばれる。 大越 里子

# 新春に詠む俳句

初明り名入りの袋祝い箸

正月の準備の中で、一番最後に父が家族各々の名前を袋に書き込む。その時の父の家族に対する想いを、私は忘れない。

一言を添えて投函年明け

また一年が過ぎ去ってゆく。便利な時代だが、人とのやりとりを楽しみながらのペンを走らせる。新しい年の幸せを願いつつ。

メモ日記確かめている去年今年

歳月の過ぎゆく疾さ。今年は亥年。猪突猛進ではないゆつたりとした、歳に見合った歩みでいきたい。行動を間違えないように。

しづかなる水に従ひ年迎ふ

今年新しい元号が始まる特別な新年。神聖な気持ちで迎えた。期待で心がふくらむ。穏やかにして前向きな姿勢を持ち続けよう。

初詣母に合わせる歩幅かな

恒例の元朝参りは成田山。家族で出かける。参拝客で混み合う境内に、母を気遣いながら本堂へ。皆の健康と平和を祈願する。

凧高く空に消え去り泣く子おり

凧も程良く晴れた日に、幼い息子と凧揚げをした。途中、糸が切れて凧ははずこへやう。泣いている息子。遠い思い出である。

即位なるこの年頭や浦明かり

時代変遷の空気を再び味わう事が出来て幸せである。皇室の安泰を祈り、穏やかな自然の中で暮らせる事を念じてやまない。

鳩百羽わたしも鳩に初詣

塩竈神社には鳩が沢山いる。首を前後に振り振り歩く仕草は、何とも愛嬌があり、私もその中に。今年も平和でありますように。

加藤 節子

小池 陽子

関沢 美江

高田 智子

沼尻 芳子

福嶋 マスイ

古橋 初子

増田 洋子

# 新春に詠む川柳

一億の民に平和の年賀状

今や〇〇ファーストが時流。これが火種で戦争も現実味。解決策は肥った我欲を削り譲り合う事。出来た隙間に平和の種を蒔こう。

心から心に届く年賀状

メールや電話よりやはり手書きの年賀状は嬉しいものです。今年も何か良い事が有る様な気持ちにさせてくれます。

年賀状辞退の時期か迷い筆

夫婦揃って八十路に入り年賀状を辞退しどきを模索する歳になる。続けようか止めようか正月が来ると堂々巡りを繰り返す。

猪のパワー肴に屠蘇を酌む

年々衰えていく体力、今年は猪のパワーを借りて乗り切って行きたいと思っています。

初詣で玉砂利音で身がしまる

明治神宮の近くに居た頃、参道の玉砂利を踏み締めながら、身の引きしまる思いで、新年を迎えたものです。

姑も肩が凝ってるお正月

普段夫婦でのんびり暮らしているのがお正月は大忙し。お嫁さんも連れてくる様になるとなおさら。亡き姑に感謝しています。

三が日どどん軽くなる財布

孫を連れて娘が帰省する。年々大きくなってゆく孫に、それなりのお年玉を用意する。嬉しいがすっかり財布も軽くなって行く。

受験生無理な願いも絵馬に盛る

はみ出すほどの願いが書いてある絵馬はだいたひ受験生である。有名校の名がずらりと並び。切実さが痛いほど分かる。

富永 柳道

富田 こうし

臼井 桃代

太田 鳴子

京極 いく

兵藤 猫目石

内野 泰守

谷藤 美智子